

SHOW HEY シネマールム

★★★★

プーチンより愛を込めて

2018年/ラトビア・スロ・チェコ・ウクライナ・ドイツ・フランス映画
配給：NEGA/102分

2023（令和5）年6月17日鑑賞

シネ・リーブル梅田

Data

2023-74

監督・脚本・撮影・出演（ナレータ
ー）：ヴィタリー・マンスキー

編集：グンタ・イケレ

出演：ウラジーミル・プーチン/ミ
ハイル・ゴルバチョフ/ボリ
ス・エリツィン/トニー・ブ
レア/アナトリー・チュペイ
ス/ベロニカ・ジリナ/ライ
サ・ゴルバチョフ/ミハイル
レシノ/ドミトリー・メドヴ
ェージェフ

👁️👁️ みどころ

2016年のヒラリー・クリントンVSトランプ、2020年のバイデンVSトランプというアメリカの大統領選挙も面白かったが、1999年12月31日の、ロシア連邦初代大統領ボリス・エリツィンの引退宣言によって実現した、第2代大統領選挙を巡るドラマは、それ以上に興味深い。それを撮影したドキュメンタリー映画が本作だから、これはすごい。

なぜ、そんな映画が撮影できたの？ヴィタリー・マンスキー監督って一体何者？“プーチンの提灯持ち”ならいざ知らず、骨のあるジャーナリスト、映画人だとしたら、その身に危険はないの？

中国の習近平国家主席は“2期、10年”の“慣例”を破って3期目に突入しているが、プーチンは2024年の大統領選挙に勝利すれば、24年目を迎えることになるからすごい。ロシアでは現在、ウクライナからの反転攻勢を受けて苦境に陥る中、プーチンの“影武者説”まで登場しているが、北朝鮮と共に、この“悪夢”はいつまで続くの？本作を見ただけで解決策が見えるわけではないが、とにかく本作は必見！

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■この映画は一体ナニ？タイトルだけでこりゃ必見！■□■

中国では2022年10月、習近平国家主席が「最高権力者の任期は2期、10年」という「暗黙の取決め」を破って3期目に入ったことが世界的に注目された。しかし、中国と同じ一党独裁共産主義国であるロシアでは、ロシア連邦初代大統領ボリス・エリツィンの後を継ぎ、2000年に第2代大統領に就任したウラジーミル・プーチンが、当時の憲法上の制限から2期で退いたものの、2012年の大統領選挙で復帰し、実質的にプーチン政権は20年以上にわたり続いている。もちろん、2022年2月24日のウクライナ

侵攻を決断したのも彼だ。しかし、邦題を『プーチンより愛を込めて』とされた、ヴィタリー・マンスキー監督によるドキュメンタリー映画で、2018年、ラトビア・スイス・チェコ・ロシア・ドイツ・フランス映画とは一体ナニ？

『007』シリーズは1962年の『007は殺しの番号(ドクター・ノオ)』から、2021年の『007/ノー・タイム・トゥ・ダイ』まで、計25作が作られたが、その第2作目は『007/危機一髪』(原題『From Russia with Love』。なお、邦題は1972年の再上映時に『007 ロシアより愛を込めて』に変更された。) (63年) だった。同作は、第1作以上にアクションを中心とする“見せ場”を増やしたが、他方でスパイ映画としてのリアリティ色を強めるため、第1作のSF色は薄められた。そのため、『寒い国から帰ったスパイ』(65年) ほどのリアリティーはなかったものの、当時のソ連にとって好ましくない描写もあり、1991年のソ連崩壊まで、その後『007』シリーズは上映禁止になったそうだ。また、同作ではマット・モンローが歌った主題歌『ロシアより愛を込めて』が大ヒットし、第3作の『007 ゴールドフィンガー』(64年) でシャーリー・バッシーが歌った『ゴールドフィンガー』と共に、今日まで歌い継がれている。しかし、『プーチンより愛を込めて』とは一体ナニ？ちなみに、本作の原題は『PUTIN'S WITNESSES』(プーチンの目撃者) だそうだが、こんなタイトルを思えば、それだけで、こりゃ必見！

■この監督はなぜ『映像の世紀』以上の貴重な映像を？■

本作を監督・脚本・撮影・出演した、1963年、ウクライナ生まれのヴィタリー・マンスキーは、パンフレットによれば“現代ロシアのドキュメンタリー映像作家／製作者のなかで最も高い評価を受けるひとり”とされている。本作のパンフレットには7ページにわたってヴィタリー・マンスキー監督インタビューがあり、そこでは、「本作は、いつ撮影したんですか？」との質問に対して、「私が国立テレビチャンネルのドキュメンタリー映画部の部長だった時に、撮影を始めました。」「当時は、ロシアは自由で、危険やリスクがなかったのも、私は直属の上司とさえ調整なしにプーチンについての撮影をはじめました。それは私の立場としては、当然すべき仕事だったんです。」と答えている。

私は近時のNHKの“バラエティ路線”化に反対だが、「さすがNHK！」と思わせる番組がある。その第1は「NHKスペシャル」、第2は「映像の世紀パタフライエフェクト」、第3は「ETV特集」、第4は「映像の世紀」だ。ペレストロイカを主導し、米ソの東西冷戦を終結させた、旧ソ連最後の指導者ゴルバチョフが2022年8月に91歳で亡くなったため、これらの番組は次々とゴルバチョフの偉業をさまざまな観点から再放送した。2023年6月17日に再放送された「ゴルバチョフの警告～冷戦終結とウクライナ危機～」もその1つだ。

これらのNHKが保有しているアーカイブ映像は貴重なものばかりだが、本作のスクリーン上に映る、若き日のプーチン氏の姿はそれ以上に貴重なもの。引退を宣言したエリツインの指名を受け、1999年12月31日にプーチンが大統領代行に就任してからの1

年間を追った貴重な映像を、ヴィタリー・マンスキー監督はなぜ撮影し、さらにそれを編集して1本のドキュメンタリーを完成させることができたの？それは、この監督インタビューを読めばよくわかる。逆に、これを読まなければ本作がなぜ作られ、公開できたのかも全くわからないはずだ。本作に見る生のプーチンを映した映像は、ヴィタリー・マンスキー監督の主観によるドキュメンタリー映画とはいえ、NHKが保有するアーカイブ映像以上に貴重なものだから、そのつもりで本作をしっかりと鑑賞したい。

■□■今のプーチンには影武者も？VS 若き日のプーチンは？■□■

ロシアによるウクライナ侵攻が始まった2022年2月24日以降、“侵略者プーチン”のニュースがアメリカ大統領以上に世界中に発信されている。侵攻から1年4ヶ月を経過した2023年6月の今、ウクライナによる“反転攻勢”が始まったことは明らか、そして、プーチンが苦境に陥りつつあることも明らかだ。そこで現在、まことしやかに語られているのが、プーチンの“影武者説”。黒澤明監督の『影武者』（80年）では、信玄と瓜二つの“盗人”が志半ばで死亡した武田信玄の影武者として大活躍した（？）が、今プーチンには本当に影武者がいるの？もしいるとすれば、その数は？そんなニュースがさまざまな科学的分析の下で語られている上、「影武者は2、3名存在する」というのが現在の結論らしい。なるほど、なるほど。すごい時代になったものだ。

そんな昨今の“独裁者プーチン”、“侵略者プーチン”と対比しながら、本作のスクリーン上に写るナマの（本物の）プーチン、若き日のプーチンを見ていると、彼は率直で饒舌だ。そのため、若き日の彼が語る言葉は少なくとも理解できるし、納得できる場所も少しはあるのだが・・・。

■□■エリツィンも、監督も、側近もすべて騙されたの？■□■

監督インタビューにある通り、本作は当時、国立テレビチャンネルのドキュメンタリー映画部の部長だったヴィタリー・マンスキー監督がプーチンの許可を得て撮影したものだし、2001年6月12日にテレビで放送されたことは間違いない。しかし、ロシアでテレビ放送されたものは、今日、私が日本のスクリーン上で見たこの映画と同じものなの？パンフレットを読んでも私にはそれがイマイチわからない。本作最後のナレーションでヴィタリー・マンスキー監督は「自分はただの証人と甘く見た代償を払った」と語っているが、その意味は重要だ。また、劇中でも、エリツィンがロシアの第2代大統領として推薦したプーチンに騙されたと気づく姿が映されている上、大統領選挙を支援したプーチンの側近たちが、メドヴェージェフ以外は全て排除されてしまっていることも明かされるから、プーチンの目的達成のためには、いかなる政敵も容赦なく排除するエネルギーがいかにすごいのかもよくわかる。しかし、プーチンはなぜそんなことができたの？それは本作を見ただけではよくわからないため、自分自身でしっかり考える必要がある。しかし、こんな時代によくこんなドキュメンタリー映画が日本で公開できたものだ。ヴィタリー・マンスキー監督の安全が保障されることを切に願いたい。 2023（令和5）年6月20日記